

さっぽろ

郵便振替 小樽 1-570 あじらね宛



NO 181

あじらね連絡先 今月通信担当

細田 (011-644-292) 細田英理子

今月の内容

金井さんを囲む会 --- 1.2	フェミニストの本棚 --- 5.6
紙の上でもすきり 生きる生き方 --- 3	ホッパ、表現の自由 フェミニズムについて --- 6.7
森の中の赤ん坊たち --- 4.5	情報 --- 8

1994.4.1 発行

通信購読料 1940円 (年間)

# 金井淑子さんを囲んで

3月7日、あじらの会員のOさん宅で、女性学の執筆でもおなじみ深い金井淑子さんを囲む会を開催。金井さんは「ホストモダニズム」の著者である。

当日は、O紙の取材もあり、カメラマンのフラッシュの中で、札幌の様々な分野で活動しているフェミニストたち15名ほどこり、金井さんを囲んで夜のふけままで語りあった。

こちらで金井さんの方に各地の女性たちの状況を語りつけてほしいと伝えられたので、まず、横浜、東京、新潟の女性たちの声から語り始めた。札幌(千葉)や新潟では、行政のうしろ立てで、市民助成を受けての任意の女性の働きかたも活発である。(新潟女性会誌) 5年目に入るとのこと。彼女たちは、そのほかにカー

活動専業主婦の分野に入る。  
新潟のこけからの働きかたとしては、彼女たちも、行政からいかに自立するかも、オースティン・ワグネルのテーマとのこと。ほとんど何も働きのない



フェミニズムを基にした

札幌在住の私たちとしては、目玉パフクリといったところ。スポーツおんのように民間の私たちの組織は活発であるが、行政は女性対策をほとんどしていない。いろいろ干渉されるのもわずらわしいが、ナカミがおさまつたのも困ったものである。

2、3年前、あじらのEさんから、国立婦人教育会館で用かれた女性学講座に出たが、全国の行政サイドの社会教育科や女性企画課などの担当の人たちも多く参加していた。しかし、北海道は一人もいなかったとのこと。これから男女共生の考えをめぐっては行政もたちゆかなくなってくるのに、かなり、遅れを取っているというが、私たちの感想である。

金井さんのお話は深くなかにわたっており、とても、このスペースには書き尽せない。フェミニズムとリブの関係や、フェミニズムの分析について、興味深い内容に満ちていたので、もっと知りたい方は、どうぞ、彼女の本をお求めになって、更に学んで頂きたいと思っております。

# 感想

フェミニストの旗主、Uさんの論法が、「切りかえしの技」だとすると、金井さんは受容の人ではないだろうか。私たちの立場をとっても、いかに切り捨てたりするのではなく、押しでいく一筋な感じがする。新潟などの女性会議の流れの私たちも、活動専業主婦に留まっているのに、(?)という仲間もいたが、金井さんはじっくりと見極めて分析しあわない方向を考えているだろう。私としては、学問的分析より、次は、金井さんとフェミニズムとの出会い、いきさつなど、実感の部分と是非伺ってみたいと思っている。T

あじらでも話題になった「男でもなく女でもなく」(葛森樹<sup>たつみ</sup>著)の本は、私達が言葉にできないものが、この本が深く分析し、言葉に表わしていると金井さんもすすめていたよA

3月7日の夜、我が家に金井さんとTさんとYuさんが泊まりました。私を含めると合計体重260キロは下らないだろう、という元気いっぱい(デモナイカ)の4人は夜の更けるのも忘れて、飲み、かつ喋りました。

翌朝、春の日差しがたっぷりのフローリングの床の上であお向けになって体ほぐしていた様子を思い出しています。金井さんは本で受ける印象より実物の方がずっと素敵な方です。また、必ずお顔を見せて下さい。O

※ あごら先月号で「キッチンの水音」(会員の高橋さんが別姓等について取材されたものが載った毎日新聞の記事)を紹介しましたか、それについて、早くから別姓を実践しているMさんから感想をいただきました

## 紙のうえでもすっきり生きる生き方

もちだ ゆうこ

戸籍法の中身まで突っ込んで疑問を持たないまでも、結婚に際して夫の側の姓を名乗ることに疑問をもったり居心地の悪さを感じている女性は少なくない。

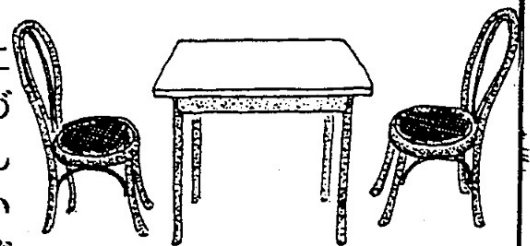
何よりも98%を越える女性が、好むと好まないとにかかわらず改姓していること自体不自然なことで、その陰には法律や制度が変わっても消えることなく受け継がれている性差別の実態がある。

そういったワナにはまらず意識的に事実婚を選択した場合、世間の予想に反してその後の生活はたいがいあっけない程すんなり行くものと体験的にも思う。が、戸籍法の犯罪性を意識しつつ何らかの事情でひとたび籍をいれてしまうと、通称使用のわずらわしさや何かが喉元に突き刺さったトゲのように、折りにふれ意識をチクチクと刺激するのではないかと思う。それでもだんだんにその状態に慣れ、多くの人たちはあえてそれ以上の行動をおこそうとはしないものだが、それをやってのける高橋さんのこだわり、行動力には頭が下がる。しかも子供たちが難しい年頃になっていて、いろいろ抵抗を受けながら、あえてそのトゲをひっこ抜いてしまったのだ。

近頃働き続ける女たちがふえて職場での通称使用の権利を認めよという声が大きくなっているようだが、戸籍法には改姓の問題の他に子の差別の問題など他にもいろいろ問題があって、かなり犯罪的なものだ。あんなもんのにのっからなくて生きることを選ぶ人が少しづつでも増えているのを嬉しく思う。

税法上の政策的おいしさを得られないなど、夫婦のいずれかが経済的自立をしていない場合など背に腹はかえられず、なし崩し的に戸籍法にかすめとられている意識的夫婦も少なくないのが現実とも思う。それでも戸籍法にのっかりつつ、1年単位で結婚離婚をくりかえしてまで夫婦の平等を保っている人の話などを知るとその元気さにはまったく驚いてしまう。

とにもかくにも、私たちのためにならない法や制度にかすめとられることのないよう、出来るものから少しづつ背を向けて行こうと思っている。取りあえず結婚なんて意中にない人も、20才を過ぎたら親元から籍を抜いて独立(分籍)、引っ越しのたびに本籍を持って歩くぐらいはできるよ(現住所と本籍の同一化)。



# 森の中の淑女たちをみて

谷 百合子

「あー、あの中に私がいる。登場している子人の女たち全員か、私だ!」。思わずそう叫びたい気持ちを抑えながら映画を見ていた。珠玉の作品という言葉かあるけれど、この映画は、それを越えて、いとおしさに満ちていた。何かか——監督か、女性であること。出演者か、素人であること。ストーリーか、ないこと。男か、一人か、いないこと。自然の美しさ。「女」であること。女を生きるとはどういうことかを感じさせてくれたこと。「若い」と和解するとは、どういふことなのかを考えさせてくれたこと。

設定は、7人の高齢の女たちか、バスと一緒に乗ってカナダのケベック州の美しい森の中に行く。若い時代のセミナーと一緒に来た女達の内、お母のコンスタンスか、少女の頃遊んだコテージか、このあたりにあるので行ってみようということになる。ところが、バスか故障し、女たちは廃屋を見つけて、救援を待つことになる。運転手で29歳のミッシェルか、歩いて救援を求めに行こうとするか、捻挫してしまう。

と、ここまではシナリオかある。しかしここからは、各自か、自由に、自分を演じるのである。釣りや蛙とりや、ベットの用意などの作業の中で、気の合う同志か、いつの間にか寄り添って、身の上語りになっていく。彼女たちの喜びや悲しみか、美しい自然の中で語られていく。それは実話である。7人の画家、メアリーか、自分は同性愛者であることとシシーに打ち明けるシーンは感動的であった。

彼女たちの語りの中で、若く美しい頃の写真か、数枚、突然写し出される。それはすごい演出で、みている人たちから、小さな声か上がっていた。私も今のうちに葬式写真をいっしょにとつこうかと改めて思ってしまった。

【ほんとうに若い頃の写真は、「この人にこんな人生かあったのか。」と感慨深いものであったか、私は、年令を重ねた現在の彼女たちの方か、ずうっと美しいと思った。老いるとはこんなに美しいことだったのか!】

美しく老いるということとは、もしもかいたら、若い時の自分を許し、いとおし  
み、癒し、そして和解することなのかも知れない。と、彼女たちを  
見ていて思った。過去の思い出から一歩、足を踏みだした彼女た  
ち。それは、いつでも誰でも、自分を癒し、力づけてくれる仲間か  
いてさえくれたら、可能なことなのである。

私はキャサリンにとっても感動した。修道服は着ていなくても、彼女は  
神と結婚した女で、困難にも立ち向かい、救援を求めて、一人歩  
出すのである。ほんとうに強いということはこの人のことを言うのだら  
う。私は、とてもキャサリンのようにはなれそうもない。でも、なりたい！

そう、この映画の中には、素敵！と思う女たちがいっぱいいた。  
女ではなかった！こういう感覚、感性は、女じゃなきゃ命からならう  
ナー。と思わず男性差別(?)をしてしまったりして...

何だかとても豊かな気持ちになって、そして、老後の不安がずーっと減って、  
この映画を強くおすすめしてくれたあづのAさん、ありがとう。映画の中の彼女  
たち、ありがとう。



## 女性学年報に凝る

## フェミニストの 本棚

岡本ともみ

今、「女性学年報」に凝っています。とにかく、おすすめ！！ フェミニスト（と自覚  
している人も、自覚していないけど実はフェミニストという人も）だったら、1冊のなか  
にどれか1編は自分の問題意識にピカッorチカッとくるものがあるんじゃないかな、と思  
い〇。おすすめする第一の理由は、当たり前ですが中身の濃さです。

ちなみに、1993年10月発行のほやほや最新刊の第14号でわたしがピカッときた  
のは、①『等身大の「わたし」が描き出したもの～干刈あがた論～』と②『CRグループ  
と私～ファシリテーターの役割と金銭授受』の二つです。まだ、全部読んでないけど、こ  
のふたつは良かった。このふたつで定価1600円のもとを取ったゾ、っていう感じです。

これまでに買った4冊についてはどれもそうだったけど、「女性学年報」に出ている論  
文や研究ノートって、すごいインパクトがあるのよね。なんせ最初の論文①を読んで、も  
う、たまたまなく「干刈あがた」というひとの作品が読みたくなって、主な作品を10冊ば  
かし、まとめて注文してしまっただけです。次の研究ノート②も飾らず正直で、ちょ  
どわたしの問題意識の時期とマッチしたこともあって、いろいろ考えさせられました。と  
いうのも、この前、フェミニスト・カウンセリング全国大会の第1回が大阪で開かれて、  
「女性とアルコール依存症」のワークショップで話題提供&司会をしたのですが、その夜  
の番外編で「専門性」をめぐる議論をちょっとして時間足りなくて、どうにもモヤ

モヤしたものが残っていたからです。このことは、また機会を改めてじっくり書きたいな、  
と思っているけれど、今はまだ無理かな・・・。

おすすめ、の第二の理由は「『年報』に毎号載っている女性学年報の編集方法や、日本  
女性学研究会の運営方法の折り目正しい民主主義は、なかなかのモンだぜ」って言いたい  
からです。これを読んで「編集方法や運営方法」が知りたくなつたひとは、ぜひ買ってね！  
(うーん、タダで宣伝しちゃった)「女性学年報」の申込先は以下のとおりです。

〒571 門真市朝日町22-6-115 竹岡 篤永

## 神さん大活躍！

会員の神さんが性教育の学習会で講師となり「ポルノ、表現の自由、フェ  
ミニズム」について一時間程話をしました。とても深く掘り下げられていて中味の濃い  
話でした。「まるで大学の講義のようだった」「その分析、洞察のすばらしさにただただ  
感心して聞いていた」等の感想が寄せられていました。そこにいた20数名が聞く  
だけではもったいない話だったので、このような学習会がある時は是非講師と  
して推せんしたいと思いました。(※テープを聞きたい人は細田まで)

あごらの通信でも何回かにわけてそのことを少し書いてもらうことにしました。

## ポルノグラフィー・“表現の自由”・フェミニズム



その1

神

《「ポルノは暴力」というのは、わかる。でも“表現の自由”が  
護られなければならないというのも確かだ。——さて、どう考えた  
らいいのだろうか?》というのが、この「ポルノグラフィー・“表現  
の自由”・フェミニズム」という三題断のテーマです♡

### ◆ポルノ、わいせつ、有害図書

「ポルノと“表現の自由”」といえは、“わいせつ”“有害図書”“取り締まる”  
“自主規制”などの言葉を思い浮かべてしまう私ですが、なんというか“ポルノ”を  
売る側、それを“わいせつ”“有害図書”として取り締まる側、さらにそれを“表現  
の自由の侵害”として批判する者、というそれぞれが、ある意味で「同じ穴のムジナ」  
じゃないかと思ってしまう。 “性的な行為や事物の描写(がロコツかどうか)”  
という部分のみに注意を集中させていて、「性差別」という点には、まるで目が向け  
られないところがね——“性描写”がカゲキでなければいいのかって感じ。

…でも、ここで“有害図書”や“規制”について、つつこむ必要、ないよね？

一応簡単に、私の立場を言っちゃうと、私は、そのテのものがなくなってほしいとは思  
うけど、だからといって、国家権力が“取り締まる”筋のものじゃないと思ってる  
し、“有害図書”というレッテル自体も、子どものためというよりは「子ども差別」  
から来てるものだと思ってる。

“わいせつ”に関して言うと、まず「女の身体」の部分に対して“わいせつ”扱われるのって、非常に不愉快だね。生きて、存在している「身体」は、ただそこに“在る”のであって、“わいせつ”などと呼ばれる筋合いはないのよ。

「欲望」と、その「欲望を喚起する対象」があったら、“わいせつ”と呼ぶにふさわしいのはその「欲望」の方であって、その「対象」じゃない（責任転嫁なんだよ、宝石泥棒が「自分にそんな気を起こさせた“宝石”が悪いんだ。自分は悪くない」って言ってるようなもんだぜ）。

余談ですが、“自主規制”といえ、なんかわけわかんない“自主規制”してるなーっていうのもあります。

某パソコンゲームでは（“18禁”ではないんだけど）、女の子の裸を描くにあたって、乳首を描かずにするんとした胸にしたりして、「そ、それが“自主規制”なんですかぁ？」と笑っちゃいました（どこのゲームが“有害図書”に指定されて間もない時期だったからなんだろうけど…）。あ、一応“Hシーン”もあったけど、“自主規制”はしていたみたいです（…フォローのつもりか？これ）。

某人気アニメでは、不良である主人公を退学にするために、教室で盗みをしてそれを主人公の仕業と思わせようとする奴が、原作では教師であったのが、アニメでは敵対する生徒の仕業になっていたり、妙な能力者と出会うシーンが、雀荘から、喫茶店に変えられていたりしました。それって、“教育的配慮”のつもりなんだろうかと思ったのだけど、その一方では、半裸の女性の術者の出るシーンで、原作にはない「このままでは、私がハダカになってしまいます！」というセリフ（この場をなんとかしてください！という意味で）とそれを見たがる観客、というシーンがわざわざ入れられていたり、原作で「何とその正体は若い女性です!!」であったセリフの『若い女性』の部分が『美少女』になっていたりして、どーゆう感覚で“自主規制”してんだらうと、首をかしげていたんです。

でもこうやって見せられてみるとね、同じシーンでもいろんなふうに変えられるんだとか、そうすると単純に「事実なんだからそう言うしかないだろう」とは言えないとか、そういうささいな言い回しで、脚本家の感覚がわかっちゃうとか、いろいろ考えちゃうんですよ…。あ、余談が長くなってしまった。

実は「わいせつなんてのは存在しない」でも「わいせつ、なぜ悪い」でもどっちでもいいような気がしてるんだけど、それでもやっぱり、現在のポルノのありようはそのまま肯定はできない。だって「人権侵害」なんだもの、きっぱり（…どう「人権侵害」なのかは、また後で書きたいと思います）。



# あごら札幌が女性せいかつ誌 *Ontona* に紹介された

3月7日の金井さんと関さんでの会を道新オトナで取材してくれよこになった。オトナは女性を対象とした情報誌である。一面のトップ記事で「あごらカラーだ」というのでみんな興奮してしまった。何度かあごらじみの記者Iさんの文章は素晴らしい。一同大喜び！ 向いあわせも多く、会員増加の可能性も、と心は弾む。でか。私たちの写真がイマイチ。お互いに、「もうちょっと。私たち、実物はいいよネー」となぐさめあうやらホヤくやら。読者の革代に負いたら、「いやー、実物と何にも変わってないよ。」と。

## 性教育学習会「ライフを考える」 INFORMATION

4/23 (土) PM 6:30 ~

女性センター

性教協いしかりサークル(644-2927 細田)

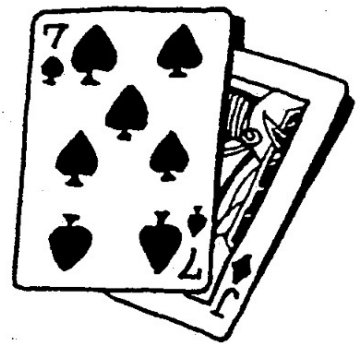
## エイズの電話相談をしてみませんか?

相談員養成のための講習会を6月から7回開く予定です。エイズ患者・感染者を支援しているこうと活動している“レッドリボンさくら”が主催です。詳しくは 011-786-7319 ~

## 次回あごら編集会議

5/7 (土) PM 7:00 ~

細田宅 (西区琴似1条6丁目2-25-408)  
644-2927



# あごら

・オトナであごらが紹介されたのでいろいろな方から電話をいただきました。毎月通信を出すのは大変だけど、反響があると「あーまた元気出して編集しよう」という気になります。それにしてももう少し人手がホシイー！（えりこ）

・Stop 芦原港を伊勢に行ってきた。朝5時に起きて漁師さんの船にのせてもらった。70cmのイシダイや産きとあったイカを、鞆からすぐおさめにくれた。あまりのおいしさに不覚にも泣いてしまった。芦原は海がメの産卵地。産卵まで澄んだエメカトウリ一海の海上で、Stop 芦原の決意をあらたにしてきた。（ゆりこ）

